



いつの時代にも 街にはアートがある

ARTIST'S VIEW / インタビュー
加藤アキラ KATO AKIRA

特集「まちなかアート散歩ガイド」

アーティストコラム 田幡浩一

ARTIST'S VIEW

加藤アキラ
KATO AKIRA



アーティストが切り取った前橋を
紹介するコーナー



INTERVIEW

日常にあるものを
アートにする方法
THE METHOD OF TRANSFORMING OUR SURROUNDINGS INTO ART.



ー今回、表紙の撮影をした松葉屋とはどういったご縁があるんですか？
松葉屋の奥さん（村松妙子さん）は昔、やまだや画廊の受付として勤めていたことがあって、その頃から知ってるんです。松葉屋に嫁いだということは後になって知って。行くようになったのはアーツ前橋が開館してからです。やまだや画廊は当時、金子英彦さんがやっていたのですが鎌倉の方に引っ越されて、それで空いたんです。その場所がもったいないとい

Photo: 上原ミワ

1963年に前橋で生まれた前衛美術集団「群馬NOMOグループ」の一員として活躍した加藤アキラさん。80年代には沈黙の時期もあったが、ダンサーの田中泯さんとのコラボレーションなどを経て、今も現役で創作活動続けるアーティスト。「モノ」との対話の中から、物質の特性を可視化し、新たな「モノ」へと変化させる手腕は、整備工でもあった彼ならではの。その作品群は、「モノ」の時代から遥かな時を経て「情報」の時代となった今、何を物語るのだろうか。

うので、藤森勝次が中心になって、作家たちがグループで運営していたんです。4年か5年くらいやってたのかな。ーそのNOMOグループについて詳しく知りたいのですが。砂皿富男や、藤森勝次、田島弘章とか、最初4人で作ったのかな？金子さんは私よりちょっと先で、私は後から入ったんですけどね。当時、前衛グループといわれるグループが全国的に広がりを見せて、各地で発生したんですね。そういう

時代に活動していたんです。その中で15人が商店街のシャッターに描くというのと、「標識絵画」という、絵画を道路標識に見立てて屋外に展示する活動に参加していました。ー加藤さんがアートの世界に入った最初は絵画からですか？
NOMOグループの前は、高崎にあった松本忠義の画塾に通っていたんです。そこで油絵とか石膏デッサンとか色々やっていました。その時にNOMOグループの金子英彦さんと出会って、それから考え方が一変したというか、作品の方向性が変わったんです。ー群馬アンデパンダン展が1965年ですが、その頃でしょうか？
そうですね、その頃がいちばん境目になってます。群馬アンデパンダン展はまだ100号のキャンバスに描いていた頃ですね。ー60年代はNOMOグループの活動と並行して作品の方向性も変わったのでしょうか？
はい。自分より前にいたメンバーの作品には魅了されたといいますかね、自分が描いてるものと比べると、現代性を感じられるそっちの作品のほうが惹きつけられるというか。それが変わっていく要因になったんじゃないかな。ー当時のことで、特に思い出に残っているようなことはありますか？
当時、ピカソ展を観に行っただんですが、帰ってきた時に金子さんたちに「どうだった？」と聞かれて、「よかった」って言ったら、「どうよかった？」って聞かれるわけですよ。でもどういう風にいいという説明ができなくて、それをあとで突っ込まれて（笑）。要するに、今から思えば、みんなが良かったと言うから良いと思ったんだってというような、大衆心理みたいなものに引きずられていたと気付かされて。それで、「ものを疑ってかかれ」ということを金子さんに教わりまして。そこからすぐ考え方が変

わったんです。今から思えば金子さんは戦争体験があった時代に育ってますから、日本が敗戦になった時に、それまで信じていたものに裏切られたという部分があって、「疑ってかかれ」ということが根底にあるんじゃないかと思うんですけどね。ー当時のNOMOグループは社会に対してのメッセージということを意識して作品に取り組んでいたんでしょうか？
そうですね。ー社会に対するアートの役割や、社会とアートの関係性について加藤さん個人としてはどのようにお考えでしょうか？
当時のNOMOグループや金子さんが言っていたのは「日常の事物を芸術の域に引き上げる」ということでした。そういう部分で標識絵画なんかもあったと思うんですけど、そのことが今もずっとありますね。キャンバスから離れてからの作品は、自分が日常で使っているものの質感を変えるということをやっていますが、キャンバスに描いていた頃は、自分の空想とかそういう部分だから、内面的なものですよね。だからその時の社会の現実の空間とはまったくかけ離れて、虚偽の空間を作っていくってことなんですが、それに対してだんだん疑問が湧いてきて。例えば最初はワイヤーブラシを使って作品を作っていたんですが、その前にアクリル……あの頃はアクリルを買う金がなくて安い塩ビを使ってたんですけど、さらに線引きでメタリックなイメージで描いて空間を作ることによって、虚偽の空間じゃなくて、一つの作品の中に現実の空間を作ろうとしたんです。ー絵画から始まりNOMOグループの時代を経て、表現方法も変わってきていると思いますが、一貫したテーマはありますか？
物質の持つ「物質感」ですかね。物質感の存在っていうのかな。美術に使うのはあまり関係ない素材を使って現象を楽

しむ、素材感の探求っていう部分が一番大きいかも知れないですね。ー60年代の前橋で活動されていた加藤さんが、50年の時を経て前橋で展示することに特別な意味を感じます。今の前橋で活動されている若いアーティストとの交流もあるんですか？
アーツ前橋が開館した頃なんですけど、八木隆行さんに自分のスペース（yagins）で展示をやってくれないかと言われて、最初はこんなジジイでいいのか？って言ったんですけど（笑）。「歳なんて関係ないんだ」って言ってくれてましてね、そこでやらせてもらったのが一番のきっかけなんですけど、八木さんに言われて自分も逆に元気づいたんです。ここまで来るともう相手してくれないんじゃないかと思ってたから（笑）。八木さんみたいな若手の作家さんから声をかけてもらえるのは非常に幸運だと思っています。ー今回の展示について感じることは？
この展覧会で言うと、自分の今まで作ってきた作品が全部並ぶっていうのは自分も見ることがないし、時代がずれているものが一つにまとまるのを自分で見たいっていうのが一番大きいかもしれないですね。これから見ることはないだろうと思ってるんだけど。一つの空間の中に集まるということで、また別な見え方が出てくるんじゃないかなと思っています。ー幅広い層のお客さんが展示を見に来ると思いますが、特に若い世代に向けてメッセージはありますか？
自分の若い頃は情報ってほとんどなかったから、今の時代ってすごい情報過多で、幸運と不運が入り乱れて混沌としていて、見定めが付きづらいというか、答えがないというか……、そういう時代の難しさを抱えてると思うんですけどね。あんまり未来が明るくなるとも思ってないし、どうしたらいいか、逆にこっちが聞きたいくらい（笑）。
2017年2月7日収録 聞き手：殿岡 渉

《REPORT-EA9》1966年 アーツ前橋蔵

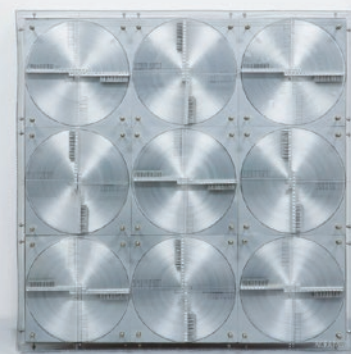


Photo: 本橋伸也

加藤アキラ（かとう・あきら）

1937年群馬県高崎市生まれ。本名・昭。中学卒業後、車の整備工として働きながら松本忠義の画塾に入る。1965年「第1回群馬アンデパンダン」展に出品。群馬NOMOグループに加入。1966年「第10回シェル美術賞展」佳作受賞、「第4回ジャパン・アート・フェスティバル」優秀賞（通産大臣賞）を受賞、1969年「現代美術の動向」展（京都国立近代美術館）に招待出品するなど頭角を現していく。その後個展を中心に活動し「アードキュメント'87」（栃木県立美術館）、1989年「RASENDO SPIRITUAL REJOICE 加藤アキラ 田中泯 立体作品と舞踏」（RASENDO、群馬）、1993年に「現代美術への招待ー加藤アキラ・金井訓志展」（高崎市美術館）、2010年「社会芸術「自力更生車+α計画」2010 in 宇都宮とその周辺」（宇都宮市内商店街）、2013年「アーツ前橋開館記念展 カゼイロノハナ」（アーツ前橋）など美術館から屋外のアートプロジェクトまで活動の幅は広い。

まちなか アート散歩ガイド

前橋のまちなかには民間団体や個人が運営するギャラリー・芸術文化施設が多数あり、商店街などを利用したイベントや展示の試みも行われてきました。古くからある画廊が姿を消しつつある一方で、若い世代の作家が活躍する場は近年増加しています。路傍の草花も芽吹くこの季節、古今のアートを巡る街歩きを楽しんでみてはいかがでしょうか？

■ アーツ前橋



アーツ前橋ギャラリーの1階では、中堅アーティストを紹介する「Art Meets」や、地域ゆかりの作家と収蔵品を紹介する収蔵作品展など、入場無料の展示を行っています。受付の脇にあるアーカイブスペースには、美術関係の蔵書が揃う本棚があり、閲覧は自由。1階フロアには他にも福祉施設で作られたバラエティーに富んだグッズを販売する「mina」や、平日のランチ利用や街歩きの休憩に最適な「ロブソンコーヒー アーツ前橋店」があり、展示の観覧目的以外でも利用できます。また、まちなかにある「堅町スタジオ」はアーツ前橋が運営しており、アーティストが制作・滞在できる場所として活用しています。

前橋の芸術文化を育んだアート関連施設

加藤アキラも60年代に参加した群馬NOMOグループの拠点となった「やまだや画廊（のちに「ぐんまアートセンター」として継続）」をはじめ、地域の芸術文化の発展に貢献した施設は市内に多くあり、画家であった近藤嘉男の自宅兼アトリエを改装し1997年に開館した「広瀬川美術館」もその一つ。戦後、焼け野原となった前橋で近藤が始めた絵画教室「ラ・ボンヌ」と「生活造形実験室」は地域の文化復興の象徴的存在でもあった。



1948年に建てられた広瀬川美術館の建物は、1999年に戦後の建築としては全国初の国登録有形文化財に登録された。



E map 前橋“市民”ギャラリー

アーツ前橋の地域事業から生まれたアートのスペース。現在は特定非営利活動法人 map が運営している。
場所：前橋市千代田町 2-12-7
営業時間・定休日：展示により異なる
<http://www.facebook.com/maebashiartpractice/>

F 萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館

萩原朔太郎を始め、近代詩史に名を残す郷土の詩人の資料を展示。年間を通し様々な企画展も行う。
場所：前橋市千代田町 3-12-10
開館時間：9:00～17:00
休館日：水曜日（祝日の場合はその翌日）・年末年始
<http://www.maebashibungakukan.jp>

G ギャラリー アートスープ

絵画やイラストなどの平面作品に限らず、彫刻、陶芸、アクセサリなど様々な企画展や個展を開催。
場所：群馬県前橋市本町 2-1-6
営業時間：11:00～19:00
定休日：火曜日、水曜日
<http://artsoup.blog.fc2.com>

H 前橋文化服装専門学校付属 アートスペース（旧前橋文化研究所）

元は服飾の専門学校だった建物をギャラリーとして利用。
場所：前橋市本町 2-18-8
営業時間・定休日：展示により異なる
<http://frontbridge.web.fc2.com>

I 煥乎堂

以前はギャラリーを併設（2005年まで）していた老舗書店。アート関連の本も取り揃えている。
場所：前橋市本町 1-2-13
営業時間：10:00～21:00（日・祝は20:00まで）
定休日：無休（元旦のみ休業）
<http://www.kankodo-web.co.jp>

J 広瀬川美術館

戦後、前橋の芸術文化の発展に寄与した画家・近藤嘉男の自宅兼アトリエを美術館に改装。
場所：前橋市千代田町 3-3-10
開館時間：10:00～17:00
定休日：月曜日
<http://www.hirosegawamuseum.sakura.ne.jp>

K COOL FOOL

音楽ライブが中心だが、詩人がポエトリー・リーディングでステージに立つこともある。
場所：前橋市千代田町 5-2-10 SATO ビル 2F
営業時間：21:00～（ライブのある日は早まる）
定休日：火曜日
<http://sound.jp/coolfool/pc/>

L ティーストアー

紅茶の販売のほか、2階で写真やイラストなどの展示、ライブを不定期で行っている。
場所：前橋市本町 2-8-9
営業時間：12:00～19:30
定休日：月曜日、火曜日
<https://www.facebook.com/bkstand/>

アーツ前橋周辺のアートのスポット

A ya-gins

場所：前橋市千代田町 3-9-2
弁天通りアーケード内
営業時間：13:00～20:00
営業日：金・土・日（展示期間中のみ）
Facebook ▶「yagins2012」



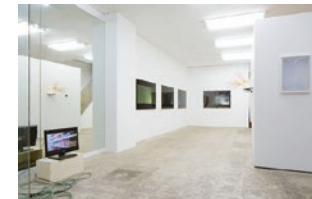
Photo: 毛利聰

気軽にお立ち寄りください。

オーナー 八木隆行さん

B Maebashi Works

場所：前橋市千代田町 2-7-17
営業時間：12:00～19:00
（展示期間中のみ）
営業日：土・日・祝（展示期間中のみ）
Facebook ▶「maebashiworks」



企画展では美術館とはまた違う独特な作品が見られます。トークや「スナックサワコ」などのイベントもやっています。

代表 カナイ サワコさん

C kigi

場所：前橋市本町 2-1-3 筒井ビル 1F
営業時間：12:00～19:00
定休日：水曜日



ステンレス線を使ったアクセサリ作りのワークショップもやっています。気軽に入って作品を間近で見てください。

オーナー 黒澤千絵さん

D ギャラリー君香堂

場所：前橋市千代田町 4-1-6
営業時間：12:00～18:00
定休日：水曜日（展示期間中無休）



工芸品は使っていただいて、絵も飾ってほしい。ぜひ気に入ったものを何かひとつ、手元に置いて楽しんでください。

オーナー 新井竹子さん

COLUMN アーティストコラム

「適当に買ったアナログカメラ」 田幡浩一

僕のおすすめアイテムは「適当に買ったアナログカメラ」です。最近はスマートフォンを持っていない人の方が珍しくなり、それだけでデジカメと同じくらい、もしくはそれ以上の写真が撮れる時代になってしまいました。携帯で撮った写真は簡単に良い雰囲気加工できるフィルター機能もあって、雑誌に載っているような写真を誰でも手軽に撮れてとても便利にはなりました。僕は写真やカメラの専門家ではないのでわからないことだらけですが、以前から携帯のカメラにはどこか味気なさを感じていて、アナログカメラが欲しくなりました。とはいえ、何を買ったら良いのかまるでわからないので、ある日蚤の市にでかけてみて、使い方がまるでわからないカメラを適当に買ってみることにしました。どうやっ

て撮ればいいのか、ちゃんと撮れるのかもわからない、安いカメラを触ってみて、フィルムを入れてシャッターを切り、現像に出してみる。そうすることで、自分では予想もしなかったような色味や味わいのある写真がプリントされてくる、という新鮮な驚きがありました。これは、携帯で自分のイメージに近い写真をコントロールして撮る、ということとは真逆のことをしているように思えて、シャッターを切る瞬間がとても貴重で、そして神秘的にも思えました。パソコンやスマートフォンの登場で誰でも手軽に操作出来るようになった写真や画像処理を、もう一度アナログの操作が難しい機材をあえて使ってみることで、自分ではうまくコントロール出来ない「不自由さの中での発見」がまた味わえると思います。



田幡浩一（たばた・こういち）

1979年生まれ。最近の個展に、2015年「Scape」（大和日英基金／ロンドン）、2016年「One way or another」（ギャラリー小柳／東京）など。作品は東京都現代美術館、原美術館（東京）などに収蔵されている。5月30日までアーツ前橋で開催している「Art Meets04 田幡浩一／三宅砂織」展の出品作家。

WORKS 収蔵品紹介

アーツ前橋では、前橋市がこれまでに収蔵してきた作品に開館後に新たに収蔵した作品を加えて約650点を収蔵しています。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。

息づかいや肌の温もりをも写す

石内都《絹の夢 #6 桐生 2011》
ISHIUCHI Miyako Silken Dreams #6 Kiryu 2011
2014（平成26）年 タイプC プリント 151×100cm
2016年度購入



石内都（桐生市生まれ／1947－）は2014年に日本人女性として初めてハッセルブラッド国際写真賞を受賞するなど、国際的に高く評価される写真家のひとりで、現在まで精力的に撮り続けています。2005年のヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表に選出され出品した、母の遺品を撮影した〈Mother's〉シリーズに続き、2007年から広島市の被爆資料の衣類などの〈ひろしま〉シリーズを撮影するうちに、「絹という素材の純正で上質なつよさ、美しさ」に心打たれます。さらに6歳まで過ごした群馬県桐生市が織物の産地であることもあり、2010年より絹を題材として、

銘仙、繭、生糸、織物工場など、日本の近代化を支えた絹産業の痕跡を撮影したのが〈絹の夢〉シリーズです。大正から昭和にかけて流行し、アール・ヌーヴォーやアール・デコ調の大胆なデザインと鮮やかな色彩が若い女性に受け入れられた銘仙。石内の撮る写真は、染織資料の記録としてではなく、ファッションを楽しむ当時の女性たちの温もりや生活を垣間見せるようです。〈絹の夢〉シリーズは石内の出自にまつわる個人史と、日本の近代化の歴史が経糸、緯糸となり織り込まれた作品といえます。

まえばしぶんか探索隊 うしろまえばし

<https://www.facebook.com/ushiromaebashi/>

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。街を歩いて気になるものをアーカイブしていきます。活動はFacebookでチェック！



「眺めのいい部屋、あります!」

木瀬農協の建物は、なんか夢があって好きです。てっぺんの三角屋根の家、眺めがよさそうですね。一度入ってみたいなあ。（隊員A）

こんなたばこ屋さん、最近めっきり減りましたね。夜見ると、郷愁を誘います。立川町通りの一本北側の通りにて。（隊員A）

滞在制作事業

群馬県ゆかりの アーティストを募集!!

アーツ前橋では、前橋で滞在制作を行う、群馬県にゆかりのあるアーティストを募集します。選考を通過したアーティストには、前橋での滞在と制作場所を提供するとともに、活動費として200,000円を支給します。

プログラムA 群馬県にゆかりがあり、30歳以下のアーティスト
プログラムB 年齢制限なく、群馬県にゆかりのあるアーティスト
募集期間：2017年4月10日（月）～5月7日（日）※当日消印有効
対象分野：群馬県にゆかりのあるアーティストであれば、表現分野は問いません。

▶ 詳細はアーツ前橋 WEB サイトでチェック！



「夜の街角に浮かぶ窓口」

まえばし COLLECTORS FILE コレクターズ・ファイル #6



表町
青柳旅館
主人

長谷川昇さん

街の人が集めているものを紹介してもらおうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？

マラソン大会のゼッケン 約100枚



過去に出場したマラソン大会のゼッケンを、旅館のカラオケルームの天井に貼っています。初出場は32歳のとき。県内に限らず各地の大会に出場したのを、全部洗ってとってあります。ホノルルマラソンも選層の記念に走って完走。70歳の時にも参加して、歩いて完走したんですよ。



みんなで作る「マエバシマンが!」1コマ横36×縦23ミリのフォーマット（拡大も可）で応募ください！宛先は〒371-0002 前橋市千代田町5-1-16 アーツ前橋 アンドアーツ担当まで。

マエバシマンが!
作：いとしのテリー

EVENT

まちなかイベント情報

総合教育プラザ 名作映画劇場

4月24日[月] 14:00～

前橋市総合教育プラザ 2階 視聴覚研修室

映画『野ばら』(1957年/オーストリア)を上映。

入場無料(先着112名)。開場は30分前。

白川昌生企画「春の木馬祭り」

4月29日[土・祝] 11:00～13:00

大蓮寺集合(前橋市千代田町3-3-24)

毎年恒例の「駅家ノ木馬祭」を今年は春にも開催!

前橋中心市街地から広瀬川沿いに利根川に向かって

木馬神輿を担ぎます。詳細はこちらをご覧ください。

www.facebook.com/umayanomokuba/

敷島公園ばら園 ばら園まつり

5月13日[土]～6月4日[日]

敷島公園 ばら園

毎年恒例のばら園まつり。初日には特設ステージで

前橋マンドリン楽団の演奏などが行われます。

前橋クラシックカーフェスティバル

5月21日[日] 10:00～15:00

中央イベント広場、中央通り商店街、

弁天通り商店街

1975年までのクラシックカーをアーケード商店街

にずらっと展示。クラシックカーに関するフリー

マーケットも出店。見学無料。

今月のおすすめ

by

アーツ前橋ショップ mina



古くなったものをデザインの手で新しく蘇らせる NEWSED プロジェクトの、革工場から出た廃材を利用したカードケース(税込5,357円)と、パスケース(税込3,218円)。シートベルトをリサイクルしたリボンタイ(税込4,536円)。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

加藤アキラ [孤高のブリコロール]

—それでも前衛美術であり続けること—

2017年3月18日[土]—5月30日[火]

開館時間: 11:00～19:00(入場は18:30まで)

休館日: 水曜日(5月3日(水)は開館)

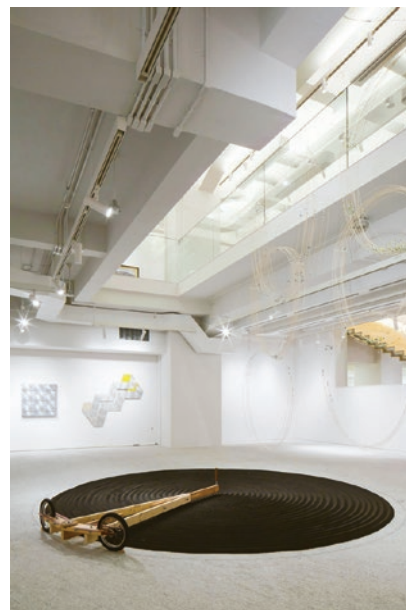
会場: アーツ前橋 地下ギャラリー

観覧料: 一般500円/学生・65歳以上・団体(10名以上)300円/

高校生以下無料

群馬を代表する現代美術家のひとりとして、加藤アキラの活動を総覧する初の展覧会です。

加藤アキラは1960年代に前橋を舞台に活動した「群馬 NOMO グループ」の作家として活躍しました。車の整備工として勤めるかわり作品制作を行っていた加藤は、アルミニウムやワイヤーブラシなど身の回りにある道具や素材を用いた作品で注目を集め、1969年には全国的に評価の高い新人が選出された「現代美術の動向」展(京都国立近代美術館)に出品しました。加藤の創作は、身の回りで廃棄されていく日用品や自然の素材を寄せ集めて僅かな細工を施す「ブリコラージュ」によって作品へと昇華させます。今日リノベーションやオーバーホールなど物を再生させ新たな価値観を付与することが求められる時代に、日常に埋もれて行く産業製品などに息吹を与える加藤の作品は多くの示唆に富むことでしょう。



《環》2013年

撮影: 木暮伸也

関連イベント

田中泯 ダンス「物とカラダの間で」

1989年に加藤アキラの作品と共演した田中泯。

再び加藤アキラの作品とアーツ前橋を場として踊ります。

日時: 4月23日(日) / 5月28日(日) 13:00～18:00

踊り: 田中泯

会場: アーツ前橋 地下ギャラリー

参加費: 無料(要観覧券)

※上記の時間内に複数回踊ります。

&Arts ISSUE 9

アンドアーツ第9号

表紙の人: 加藤アキラ & 松葉屋 村松さん夫妻

発行: 平成29年3月31日 企画・発行: アーツ前橋 制作コーディネイト: M-wave

編集・アートディレクション・デザイン: 殿岡 渉(あしか図案) 写真: 上原ミワ、木暮伸也

ロゴデザイン: 荻原貴男(OGIWARA TAKAO DESIGN)

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16 TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016

